



安富祖の藍壺（エーチブ）

沿いに「藍壺（エーチブ）」と呼ばれる遺構が二基確認されています。藍壺の口縁部は厚さが約五cm、地面を掘り下げた直径二mのすり鉢状で、製藍過程で使われる水槽のような役目をしました。リュウキュウアイが直射日光や乾燥に弱く、刈り取った後はなるべく早く水に浸さなければならぬことから、山間部の水の利便性が良い場所に作ったと考えられます。また藍壺には通常

「玉壺（タマチブ）」と呼ばれる方形の構造物が付随すると言われますが、それでも藍壺の隣に辺が約二mの玉壺が確認でき、仕上がった琉球藍を貯蔵したと考えられています。

『安富祖字誌』によると、代替染料などが出現し、安富祖での藍の栽培は大正末期に終了し

第二回内国勸業博覧会

沖縄県恩納間切総代 長浜善用

山藍

品質良好ニシテ収穫亦宜シキニ遍ス之ヲ尋常ノ蓼藍ニ比スルニ藍分ヲ含有スル多キヲ以テ染料ノ最貴重ナルモノトス其有功嘉賞スヘシ

審査官 宮里正静

小野職啓

三等有功賞

審査部長 従五位勲五等 田中芳男

審査副長 従四位勲四等 九鬼隆一

審査部長 五位勲二等 佐野常民

右ノ薦告ニ拠リ有功賞牌ヲ授与ス

明治十四年六月十日

内国勸業博覧会事務総裁

二品勲一等 能久親王

たとあります。かつては安富祖・熱田で十、十二基の藍壺があったと記されていることから、多くの人が製藍に携わったことが伺い知れます。時代は進み、衣生活の変化で藍の需要も減少していきました。残念ながら恩納村ではもう見られなくなりました生業ですが、山間部のどこかに往時を忍ぶ藍壺・玉壺が残っているかもしれません。

(町田)

《参考文献》

- ◆『恩納村誌』 仲松弥秀著 1980
- ◆『近世地方経済史料 第九巻』 吉川弘文館 1958
- ◆「とよむあふす 安富祖字誌」 字誌」とよむあふす」編集委員会 2001
- ◆「藍壺雑考」 大湾ゆかり 沖縄県史研究紀要 第4号 沖縄県教育委員会 1998
- ◆「第二回勸業博覧会解説書」にみるジュゴン史料について 小野まさ子 史料編集室紀要 第31号 沖縄県教育委員会 2006
- ◆「本部町伊豆味集落内のある藍壺と琉球藍生産について」 幸喜淳 沖縄県立埋蔵文化財センター 第40回文化講座レジュメ 2010